

文学部および大学院人文科学府における「学生による評価」の取り組み

人文科学研究院 高木 彰彦

・はじめに

九州大学文学部では2001年度から「学生による授業評価」を開始した。大学院人文科学府では翌2002年度から授業評価を開始した。現在では授業評価に加えて「カリキュラム・教育体制に関する調査」も実施し、教官に対しても授業改善に関する調査を行っている。これらの一連の調査は2001年6月に発足したFD委員会によって行われている。筆者は委員会発足当初から委員だったため、これまでこうした調査に携わってきた。それは文字通りゼロからの出発であり、手探り状態の中での3年間だった。

本稿では、こうした筆者の経験に基づいて、「学生による授業評価」(以下、「授業評価」)を中心として、文学部・人文科学府・人文科学研究院における教育と評価についてのこれまでの実績と問題点、今後の課題について私見を述べてみたい。

Ⅱ FD委員会設立の経緯と授業評価の開始

文学部におけるFD委員会は2001年6月6日に開催された第30回人文科学研究院教授会において、その設立が承認された。教授会資料によれば、委員の選出理由は「今後の教育の充実を諮るため」であり、委員の選出方法は「部内自己点検・評価委員会の推薦によるもの」であった。その任期は2年であったが、部内自己点検・評価委員会委員の任期中とするというただし書きが付されていた。

つまりFD委員会は、その言葉が本来意味するところの「能力開発」を目指すための教官の自発的活動から生まれたのではなく、部内自己点検・評価委員会の、いわば内部委員会的な性格を帯びてスタートを切ったのである。こうしたFD委員会設立の経緯は、その前年度の暮れに作成された「文学部・人文科学府・人文科学研究院自己点検評価資料」に溯る。これは大学当局から各部局への要請に応える形で教授会決定されたものだったが、当時の池田紘一研究院長は、これを踏まえてさらに、2001年度には研究院・学府・学部独自の中・長期計画を策定したい旨教授会で提案された。そしてそのための制度的措置として、将来計画委員会、自己点検・評価委員会を中核とする拡大将来計画委員会が設立されたのである。こうした組織的対応が行われた背景には、将来予想される国立大学の独立行政法人化、当初「トップ30」と呼ばれていた「21世紀COEプログラム」の募集、法人化に先立って実施される「大学評価・学位授与機構」による点検・評価を控えて、人文科学研究院・人文科学府・文学部それぞれの中期目標・中期計画の設定と実施を行っておく必要があったためと考えられる。結果的に、「21世紀COEプログラム」に選定されるとともに、「大学評価・学位授与機構」による分野別教育評価「人文学系」(平成14年度着手分)にも選定されたことを鑑みると、この池田研究院長による組織的対応はきわめて的確な判断だったと思われる。

このようにして設立されたFD委員会の当初の役割は、研究院レベルのFD研究会および研修会の開催であった。それ以前にも、教官の自発的研究会である「談話会」や新任教官による「就任講

義」のように、FDという名称こそ用いられてはいなかったものの、文学部には研究会・研修会的性格をもつ催しが存在していた。FD委員会には、ひとまずこうした既存の行事を踏まえつつ、独自の研修会・研究会を企画していくことが当面の課題として要請されたのだった。ちなみに、最初のFD委員会委員長はこの談話会のマネジメントを担当していた教官であった。

筆者の手元に残る拡大将来計画委員会のメモからは、本学におけるFD推進のための概念案として、「全学のすべての教官に年間1回以上のFDへの参加および参加報告書の提出を義務づけ」、「報告書は各部局を通して自己点検・評価委員会に提出する」といった案を読みとることができる。このことからわかるように、本学におけるFDは当初から（外部向けの）報告的な性格を帯びたものとして想定されていたようである。しかし、人文科学研究ではこうした研究会および研修会開催のみならず、「学生による授業評価」等各種調査の企画・実施もFD委員会の大きな職務として位置づけられた点に大きな特色を見いだすことができる。

前述の拡大将来計画委員会では、将来における大学評価・学位授与機構による外部評価の実施を想定して、学生による授業評価の実施も検討課題として位置づけられていた。たまたま筆者は学務委員でもあったため、学生による授業評価の実施を検討する作業グループが学務委員会内に作られた際に、メンバーの一人としてアンケート調査の企画・実施に取り組むことになった。しかし、学務委員会は教務・学生関係の諸業務を遂行する多忙な委員会であるため、作業の途中で、FD委員会の方が適切だということになり、同委員会が学生による授業評価等の各種調査を執り行うこととなったのだった。以下、章を改めて、FD委員会による授業評価の取組状況について述べることにしたい。

Ⅲ．授業評価への取り組み

1．2001年度

先にも述べたように、この時期学務委員会はシラバスの作成業務で時間がとれないため、FD委員会の実施ということで授業評価は行われることになった。初めての調査ということもあり、専任教官が担当する学部の講義55科目のみを対象として調査を実施した。55科目の総履修者数は2,527名であった（表1）。後期最後の2週間のうちに担当教官が調査票を授業中に学生に配布し、授業終了後に学生掛に設けてある回収箱に提出するよう依頼した。その結果、回収された調査票は495枚であった。調査票は外部の業者に年度内の入力および集計を依頼した。その後、業者が行った集計結果をFD委員会が分析し、各教官に全体の集計結果と担当講義の評価結果を知らせるとともに、今後の調査に対する意見を募った。

質問内容については、本稿の末尾に調査票を付しておいたので参照されたい。調査を実施するにあたっては、簡単に集計できるよう5段階に順位尺度化した設問を多く設けた。具体的には、「3 授業への出席の程度」、「4 - 1 授業内容への興味度」、「4 - 2 授業内容の理解度」、「4 - 3 予習・復習の程度」、「4 - 4 知識や理解の深まり」といった授業内容や授業に対する姿勢に関する項目と、「5 - 1 声」、「5 - 2 板書」、「5 - 3 説明」、「5 - 4 配付資料」、「5 - 5 授業の進行」、「5 - 6 開始時刻」、「5 - 7 休講の数」といった教官の授業テクニックに関する項目である。こうした点数項目以外に、授業内容およびテクニックに関する意見欄も設けて記入できるようにした。

表2は、点数項目の集計結果を示したものである。担当教官には、この全体集計結果と各自の担当講義の結果とを返却し比較できるようにしたが、各教官の集計結果は本人以外には公表しなかった。以下、設問毎に特色を見ていこう。「学年」では文学部の2年生がほぼ半数を占め、2年生が講義の履修の中心となっていることがわかる。「履修の動機」では「シラバスを見て」が半数近くを占め、次いで「所属研究室の授業だから」という必修科目との関連で履修選択していることがわかる。「授業の出席状況」は80%以上が最も多く出席状況は良好である。とはいえ、欠席者の回答は表には出てこないで、実際の出席率はもっと低いものと思われる。「授業内容の興味度」は平均値が4.0で興味深いことが示唆されるものの、「授業内容の理解度」はそれほどは高くなく、興味度ほどには理解度は十分ではないようである。「予習・復習の程度」については2が最も多く、あまり予習・復習をしていない。「専門分野の知識が深まったか」については、4が最も多く、概ね深まったといえる。

次に授業のテクニックに関する質問だが、最多頻度が4である項目がほとんどで、概ね良好といえよう。その中で「板書」のみが相対的に得点が低く、改善の余地があるかと思われる。もっとも「板書のわかりにくさ」とは、板書のまずさを指しているのか、板書そのものが不足しているのか、判断つきかねるが、意見欄を見る限り、「板書をもう少しわかりやすくしていただきたいです」や「板書、配布資料があったら、もっと分かり易くなるだろうと思います」などと両者の意見があり、双方の意味合いのあることがわかる。

2. 2002年度

2002年度は学部と大学院において授業評価を行った。学部については、前年度の回収率が19.6%

表1 各年次における授業評価の方法

	年度	学 部	学 府
調査の対象	2001 2002 2003	専任教官による講義 全ての講義 全ての授業	実施せず 専任教官による授業 全ての授業
調査の時期	2001 2002 2003	後期最後の2週間 後期最後の2週間 後期最後の2週間	実施せず 後期最後の2週間 後期最後の2週間
配布の方法	2001 2002 2003	担当教官による説明・配布 担当教官による説明・配布 T Aによる説明・配布	実施せず 大学院生の代表者による説明・配布 T Aによる説明・配布
配布枚数	2001 2002 2003	2,527 2,949 5,046	実施せず 202 492
回収の方法	2001 2002 2003	学生が回収箱に投函 担当教官が回収 T Aが回収	実施せず 大学院生の代表者が回収 T Aが回収
回収枚数	2001 2002 2003	495 1,259 2,514	実施せず 102 318

表2 文学部における授業評価アンケート(2001年度)

サンプル 数495

質問内容	項目	集 計 結 果						合計	合計
		1年	2年	3年	4年	他	計		
1(所属・学年)	文学部	1年	2年	3年	4年	他	計	490	
	人数	96	238	85	37	6	462		
	割合	19.6	48.6	17.3	7.6	1.2	94.3		
	他学部	1年	2年	3年	4年	他	計		
	人数	0	0	18	7	3	28		
	割合	0.0	0.0	3.7	1.4	0.6	5.7		
2(履修目的)	項目	1	2	3	4	5	6	7	合計
	人数	111	243	21	46	0	23	48	492
	割合	22.6	49.4	4.3	9.3	0.0	4.7	9.8	100.0
3(出席状況)	評価	1	2	3	4	5	合計	平均	
	人数	1	12	44	94	344	495		
	割合	0.2	2.4	8.9	19.0	69.5	100.0	4.6	
4-1(授業興味)	評価	1	2	3	4	5	合計	平均	
	人数	3	29	98	194	171	495		
	割合	0.6	5.9	19.8	39.2	34.5	100.0	4.0	
4-2(授業理解)	評価	1	2	3	4	5	合計	平均	
	人数	3	45	172	203	71	494		
	割合	0.6	9.1	34.8	41.1	14.4	100.0	3.6	
4-3(予習復習)	評価	1	2	3	4	5	合計	平均	
	人数	105	176	149	51	14	495		
	割合	21.2	35.6	30.1	10.3	2.8	100.0	2.4	
4-4(理解知識)	評価	1	2	3	4	5	合計	平均	
	人数	13	42	159	195	86	495		
	割合	2.6	8.5	32.1	39.4	17.4	100.0	3.6	
5-1(声)	評価	1	2	3	4	5	合計	平均	
	人数	7	34	96	187	168	492		
	割合	1.4	6.9	19.5	38.0	34.1	100.0	4.0	
5-2(板書)	評価	1	2	3	4	5	合計	平均	
	人数	16	104	177	132	55	484		
	割合	3.3	21.5	36.6	27.3	11.4	100.0	3.2	
5-3(説明)	評価	1	2	3	4	5	合計	平均	
	人数	5	45	127	214	102	493		
	割合	1.0	9.1	25.8	43.4	20.7	100.0	3.7	
5-4(配布資料)	評価	1	2	3	4	5	合計	平均	
	人数	7	34	111	145	180	477		
	割合	1.5	7.1	23.3	30.4	37.7	100.0	4.0	
5-5(進行)	評価	1	2	3	4	5	合計	平均	
	人数	1	24	308	129	30	492		
	割合	0.2	4.9	62.6	26.2	6.1	100.0	3.3	
5-6(開始時刻)	評価	1	2	3	4	5	合計	平均	
	人数	8	23	135	90	236	492		
	割合	1.6	4.7	27.4	18.3	48.0	100.0	4.1	
5-7(休講)	評価	1	2	3	4	5	合計	平均	
	人数	39	50	170	61	173	493		
	割合	7.9	10.1	34.5	12.4	35.1	100.0	3.6	

表3 文学部における授業評価アンケート（2002年度）

サンプル 数1,259

質問内容	項目	集 計 結 果									
		1年	2年	3年	4年	文学部計	総計				
1（所属・学年） （研究室）	文学部	1年	2年	3年	4年	文学部計	総計				
	人数	225	523	276	75	1,099	1,259				
	他学部	教育学部	工学部	理学部	経済学部	法学部	21C P	その他・不明	他学部計		
	人数	14	3	2	57	23	6	55	160		
	研究室	哲学	倫理学	インド哲学	中国哲学史	美学・美術史	日本史学	東洋史学	朝鮮史学	考古学	
	人数	8	21	5	1	79	76	43	1	29	
	研究室	西洋史学	イスラム史	国語・国文学	中国文学	英語学・英文学	独文学	仏文学	言語学・応用言語学	地理学	
	人数	55	0	69	15	58	17	6	90	54	
	研究室	心理学	比較宗教学	社会学・地域福祉社会学							
	人数	73	32	77							
2（履修目的）	項目	1	2	3	4	5	6	合計			
	人数	293	552	52	155	19	85	1,156			
	割合（%）	25.3	47.8	4.5	13.4	1.6	7.4	100.0			
3（出席状況）	評価	1	2	3	4	5	合計	平均			
	人数		38	135	327	745	1,245	4.4			
	割合（%）	0.0	3.1	10.8	26.3	59.8	100.0				
4 - 1（授業興味）	評価	1	2	3	4	5	合計	平均			
	人数	17	112	292	526	312	1,259	3.8			
	割合（%）	1.4	8.9	23.2	41.8	24.8	100.0				
4 - 2（授業理解）	評価	1	2	3	4	5	合計	平均			
	人数	12	219	432	458	137	1,258	3.4			
	割合（%）	1.0	17.4	34.3	36.4	10.9	100.0				
4 - 3（予習復習）	評価	1	2	3	4	5	合計	平均			
	人数	316	415	385	117	26	1,259	2.3			
	割合（%）	25.1	33.0	30.6	9.3	2.1	100.0				
4 - 4（理解知識）	評価	1	2	3	4	5	合計	平均			
	人数	39	179	407	496	137	1,258	3.4			
	割合（%）	3.1	14.2	32.4	39.4	10.9	100.0				
5 - 1（声）	評価	1	2	3	4	5	合計	平均			
	人数	16	122	300	452	363	1,253	3.8			
	割合（%）	1.3	9.7	23.9	36.1	29.0	100.0				
5 - 2（板書）	評価	1	2	3	4	5	合計	平均			
	人数	46	293	503	257	129	1,228	3.1			
	割合（%）	3.7	23.9	41.0	20.9	10.5	100.0				
5 - 3（説明）	評価	1	2	3	4	5	合計	平均			
	人数	10	138	407	466	232	1,253	3.6			
	割合（%）	0.8	11.0	32.5	37.2	18.5	100.0				
5 - 4（配布資料）	評価	1	2	3	4	5	合計	平均			
	人数	14	51	312	410	449	1,236	4.0			
	割合（%）	1.1	4.1	25.2	33.2	36.3	100.0				
5 - 5（進行）	評価	1	2	3	4	5	合計	平均			
	人数	2	60	868	280	41	1,251	3.2			
	割合（%）	0.2	4.8	69.4	22.4	3.3	100.0				
5 - 6（開始時刻）	評価	1	2	3	4	5	合計	平均			
	人数	10	79	340	286	537	1,252	4.0			
	割合（%）	0.8	6.3	27.2	22.8	42.9	100.0				
5 - 7（休講）	評価	1	2	3	4	5	合計	平均			
	人数	20	84	440	174	533	1,251	3.9			
	割合（%）	1.6	6.7	35.2	13.9	42.6	100.0				

と2割に満たなかったため、2002年度は回収率を上げるために授業担当教官に配布および回収も行ってもらうことにした。教官が回収すると授業評価の客観性が損なわれるという意見もあるが、委員会内では客観性よりも回収率を重視すべきだという意見が強かった。また、本年度は講義を担当されている非常勤講師の方にもお願いした。その結果、配布数2,949枚、回収数1,259枚で回収率は42.7%であった(表1)。なお、調査項目は前年度と同じで、調査の時期も後期の最後の2週間ということで、ほぼ同時期であった。全体の集計結果を表3に示す。表3からわかるように、サンプル数は倍以上に増加したものの、集計結果はほぼ同様な結果が得られた。しかし、注意深く見ると、どの項目も0.1~0.2ポイント低下していることがわかる。この理由を回収方法の違いによるものとみなすのか、それとも回収枚数が増えたことによって、授業態度がそれほど熱心ではない学生の評価結果が反映されたものとみなすのかはわからない。この低下の数値を低いとみなせば、調査票の回収方法による結果の違いは大差ないことになる。ここでは、一様に数値が低下していることのみ指摘しておきたい。

なお、2002年度の学部の集計結果については、九州大学文学部FD委員会(2003)「九州大学文学部・大学院人文科学府 平成14年度授業評価・教育体制に関する調査報告書」にまとめてあるので、詳しくは同報告書を参照していただくとして、本稿ではこれ以上は触れない。

大学院生による授業評価は2002年度に初めて行ったので、概要を述べておきたい。表4は大学院生に対して行った質問内容の集計結果である。質問項目は学部のそれをほぼ踏襲したので、調査票の掲載は省略した。「現代文化論」(大学院重点化にともない2000年度に新設された科目で、大学院生全員に対する必修科目となっている。したがって、大学院の授業にしてはクラスサイズは大きくなる。)を除けば大学院の授業は少人数で行われているため、授業ごとに配付・回収せず、講座ごとに院生の代表者を決めて、この代表者を通じて調査票の配付・回収を行った。大学院生の回答の特色は、点数項目の平均値を見れば分かるように、学部に比して得点がきわめて高いことである。これをどのように解釈するのかが意見の分かれるところだが、大学院の授業のみが内容的に優れているとは考えがたく、やはり、少人数の授業であるため、回答者の氏名が特定されてしまうことを考慮して意識的に高い評価を与えたものと推測される。そうした意識については意見欄にも記入されていた。したがって、クラスサイズが1~2名の少人数の場合には、調査にあたってこうした点を考慮すべきであろう。

3. 2003年度

本稿執筆時点で、2003年度の授業評価は調査票の配布期間にあたっている。したがって、今年度の結果については4月以降の分析を待つ必要があるため、ここでは、前年度と異なる箇所のみ列挙することにしたい。まず、対象とする授業を講義のみにとどめず文学部および人文科学府で開講されているすべての授業科目にしたことである。その結果、配布枚数も学部で5,046枚、大学院で492枚と、前年度に比べて倍近くになった。演習や実験といった科目に対しても同様の調査票で良いのかどうか、今後の分析結果を待たねばなるまい。また、調査票配布・回収時の客観性保持のため、今年度は配布・回収作業をティーチング・アシスタント(TA)に行ってもらうことにした。この点もどういった評価が下されるのか、今後の分析を待って判断したい。さらに、大学院生に対する

表4 学府授業評価の集計結果(2002年度)

サンプル 数102

1 (所属・学年)	項目	集 計 結 果						
	人文基礎専攻 人数	哲学・倫理学 9	東洋思想 4	芸術学 10	地理学			
	歴史的空間論 人数	日本史学 11	アジア史学 13	広域文明史学 3	5			
	言語・文学 人数	日本・東洋文学 15	西洋文学 20	言語学 9				
	学 年 人 数	修士1 21	修士2 27	修士3 0	博士1 8	博士2 9	博士3 22	空欄 7
特論								
2 1 1 (出席)	評 価	1	2	3	4	5	合計	平均
	人 数	0	1	3	15	72	91	4.7
2 1 3 (理解)	割 合 (%)	0.0	1.1	3.3	16.5	79.1	100.0	
	評 価	1	2	3	4	5	合計	平均
2 1 4 (教官説明)	人 数	0	1	10	28	52	91	4.4
	割 合 (%)	0.0	1.1	11.0	30.8	57.1	100.0	
2 1 5 (資料参考)	評 価	1	2	3	4	5	合計	平均
	人 数	0	1	5	31	54	91	4.5
2 1 6 (個人努力)	割 合 (%)	0.0	1.1	5.5	34.1	59.3	100.0	
	評 価	1	2	3	4	5	合計	平均
2 1 7 (興味)	人 数	0	8	31	32	20	91	3.7
	割 合 (%)	0.0	8.8	34.1	35.2	22.0	100.0	
2 1 8 (深まり)	評 価	1	2	3	4	5	合計	平均
	人 数	0	1	12	30	46	89	4.4
研究								
2 2 2 (出席)	評 価	1	2	3	4	5	合計	平均
	人 数	0	2	1	11	74	88	4.8
2 2 3 (参加)	割 合 (%)	0.0	2.3	1.1	12.5	84.1	100.0	
	評 価	1	2	3	4	5	合計	平均
2 2 4 (理解)	人 数	0	4	12	22	50	88	4.3
	割 合 (%)	0.0	4.5	13.6	25.0	56.8	100.0	
2 2 5 (教官説明)	評 価	1	2	3	4	5	合計	平均
	人 数	1	0	19	27	41	88	4.2
2 2 6 (個人努力)	割 合 (%)	1.1	0.0	21.6	30.7	46.6	100.0	
	評 価	1	2	3	4	5	合計	平均
2 2 7 (興味)	人 数	0	1	9	27	51	88	4.5
	割 合 (%)	0.0	1.1	10.2	30.7	58.0	100.0	
2 2 8 (深まり)	評 価	1	2	3	4	5	合計	平均
	人 数	0	4	16	33	34	87	4.1
論文指導								
2 3 2 (指導状況)	評 価	1	2	3	4	5	合計	平均
	人 数	1	5	25	34	27	92	3.9
2 3 3 (適切)	割 合 (%)	1.1	5.4	27.2	37.0	29.3	100.0	
	評 価	1	2	3	4	5	合計	平均
現代文化論科目	人 数	0	1	9	20	61	91	4.5
	割 合 (%)	0.0	1.1	9.9	22.0	67.0	100.0	
2 4 2 (出席)	評 価	1	2	3	4	5	合計	平均
	人 数	1	0	3	15	39	58	4.6
2 4 3 (理解)	割 合 (%)	1.7	0.0	5.2	25.9	67.2	100.0	
	評 価	1	2	3	4	5	合計	平均
2 4 4 (教官説明)	人 数	2	6	8	21	21	58	3.9
	割 合 (%)	3.4	10.3	13.8	36.2	36.2	100.0	
2 4 5 (資料参考)	評 価	1	2	3	4	5	合計	平均
	人 数	1	6	7	16	27	57	4.1
2 4 6 (個人努力)	割 合 (%)	1.8	10.5	12.3	28.1	47.4	100.0	
	評 価	1	2	3	4	5	合計	平均
2 4 7 (興味)	人 数	1	2	8	19	27	57	4.2
	割 合 (%)	1.8	3.5	14.0	33.3	47.4	100.0	
2 4 8 (深まり)	評 価	1	2	3	4	5	合計	平均
	人 数	1	13	15	17	11	57	3.4
2 4 9 (その他)	割 合 (%)	1.8	22.8	26.3	29.8	19.3	100.0	
	評 価	1	2	3	4	5	合計	平均
2 4 10 (その他)	人 数	1	5	8	17	27	58	4.1
	割 合 (%)	1.7	8.6	13.8	29.3	46.6	100.0	

調査も、前年度の結果を踏まえて、点数項目を大幅に削除し、授業ごとに配付するなどの変更を行った。この点についても結果の違いに注目してみたい。

Ⅳ．教育体制に関する評価とFD

学生による評価は授業評価だけではない。2001年度に授業評価がスタートした際に、それとともに「文学部におけるカリキュラム・教育体制に関する調査」についても実施する予定で調査項目を選定していた。教育の改善を図るためには、個別の授業評価のみに留めず、教育システム全体の評価も行いその改善を図る必要があったからである。2001年度については、自己点検・評価の一貫として実施することになり、その締切との関係上、11月中に結果を出さねばならなかったため、サンプル調査ということで文学部の各コースから一つずつ専攻を選び出して、当該専攻のみに対して学務委員会が実施した。したがって、以下では、2002年度および2003年度における「教育体制」に関する評価と、これに関連したFDの開催について述べることにしたい。

1．2002年度

2002年度は「大学評価・学位授与機構」による分野別教育評価「人文学系」（平成14年度着手分）の対象に本文学部および人文科学府（対象名称は「人文科学教育部」）が選ばれたため、調査の種類も増やさざるをえなくなり、「学生による授業評価」も学部生のみならず大学院生に対しても実施し、「カリキュラム・教育体制に関する調査」を学部・大学院とも実施した。さらに、専任教員に対しては「大学評価機構による分野別教育評価にかかるアンケート」も実施した。先にも述べたように、これらの調査の実施と結果の分析については、九州大学文学部FD委員会（2003）「九州大学文学部・大学院人文科学府 平成14年度授業評価・教育体制に関する調査報告書」にまとめているので、詳細は報告書にゆだね、ここでは概要について簡単に紹介する。質問項目は、「1 文学部の専門教育は体系的に行われているか」、「2 時間割の改善すべき点」、「3 シラバスに関する項目（シラバスの参照度、授業はシラバス通り行われているか、今後のシラバスの内容）」、「4 成績評価に関する項目（成績評価の方法、適切性、改善点）」、「5 教室の設備」、「6 予習と復習の時間」、「7 進学の決定時期に関するもの」である。表5はこれらの項目の学部全体の集計結果を示したものである。配付枚数は554 回収枚数は231であった。この結果の特徴を以下に述べてみたい。

まず、専門教育の体系的性についてであるが、「どちらとも」が122人と最も多く、次いで「思う」の58人、「思わない」の45人で、肯定的にも否定的にも評価されていないようである。しかし、書かれた意見を見ると、1年次および2年前期における専門教育の充実を望む意見や、演習科目における専攻学生と他学生とのレベルの差を問題視する意見など、体系だったカリキュラムを希望する意見がいくつか見られた。次に時間割については、特定の曜日・時間帯への集中を問題視する意見が多かった。2年生の箱崎日である木曜日に開講科目が多いのはやむをえない側面もあるが、今後改善すべき問題もある。シラバスについては、よく参考にされているといえるが、他に参考にすることがないという意見もあり、今後、インターネットでのシラバス公開等にも対処する必要がある。

成績評価については、成績評価の基準や方法について知りたい、試験やレポートの返却を望むと

表5 学部教育体制・カリキュラムに対する評価（2002年度）

サンプル 数231

質問内容	項目	集 計 結 果					合計	平均	
		思う	思わない	どちらとも	未記入	計			
1 - 1 (体系的)	評 価								
	人 数	58	45	122	6	231			
	割合 (%)	25.1	19.5	52.8	2.6	100.0			
3 - 1 (シラバス参考)	評 価	1	2	3	4	5	合計	平均	
	人 数	6	24	30	94	76	230	3.9	
	割合 (%)	2.6	10.4	13.0	40.9	33.0	100.0		
3 - 3 (シラバスどおり)	評 価	1	2	3	4	5	合計	平均	
	人 数	11	21	89	75	32	228	3.4	
	割合 (%)	4.8	9.2	39.0	32.9	14.0	100.0		
3 - 4 (シラバス今後)	評 価	1	2	3	4	5	合計	平均	
	人 数	6	6	59	85	66	222	3.9	
	割合 (%)	2.7	2.7	26.6	38.3	29.7	100.0		
4 - 1 (成績評価)	評 価	試験	レポート	試験とレポート	試験と出席	レポートと出席	試験とレポートと出席	合計	
	人 数	26	97	37	15	44	7	226	
	割合 (%)	11.5	42.9	16.4	6.6	19.5	3.1	100.0	
4 - 2 (評価適切)	評 価	1	2	3	4	5	合計	平均	
	人 数	3	18	88	88	33	230	3.6	
	割合 (%)	1.3	7.8	38.3	38.3	14.3	100.0		
5 (教室設備)	評 価	防音	冷暖房	OHPなど	その他	合計			
	人 数	44	93	37	15	189			
	割合 (%)	23.3	49.2	19.6	7.9	100.0			
6 - 1 (予習)	評 価	1	2	3	4	5	合計	平均	
	人 数	31	61	74	49	14	229	2.8	
	割合 (%)	13.5	26.6	32.3	21.4	6.1	100.0		
6 - 2 (復習)	評 価	1	2	3	4	5	合計	平均	
	人 数	48	99	61	20	1	229	2.2	
	割合 (%)	21.0	43.2	26.6	8.7	0.4	100.0		
7 - 1 (専門決定)	評 価	入学前	入学直後	夏休み前	夏休み後	冬休み前	冬休み後	締切前	合計
	人 数	76	16	14	18	29	21	54	228
	割合 (%)	33.3	7.0	6.1	7.9	12.7	9.2	23.7	100.0
7 - 3 (決定時期)	評 価	入学時	1年生10月	2年生4月	2年生10月	3年生4月	合計		
	人 数	1	18	42	83	86	230		
	割合 (%)	0.4	7.8	18.3	36.1	37.4	100.0		
7 - 4 (専門進学)	評 価	1	2	3	4	5	合計	平均	
	人 数	1	18	42	83	86	230		
	割合 (%)	0.4	7.8	18.3	36.1	37.4	100.0	4.0	

いった意見が多かった。こうした問題について、今後組織的に対応していく必要がある。また、設備の改善点については、冷暖房設備・防音設備・トイレの改修等を望む意見が多くみられた。このうち、講義棟の冷暖房設備およびトイレの改修については、2002年度末までに改修されたため、今後はこうした不満は少なくなると思われる。最後に、専門分野の決定時期だが、これは、入学以前から決めていたという者と2年次への進学直前という者に二極化した。また、進学時期については、3年4月、2年10月と回答した者が多く、現在よりも遅い時期を希望している学生が多かった。

以上のように、この調査はカリキュラムや教育設備に関して尋ねたものである。FD委員会では出された意見を要約し、2003年7月に開催した第1回FDで結果を公表するとともに、そこでの意見交換を踏まえて、改善すべき点について関連委員会に対して要望書を提出した。この結果、例えば、研究室委員会で各演習室に網戸を設置することが検討され、実現へと向かっている。このように、各種調査の結果を踏まえ、改善の余地があると思われる点を指摘し、該当委員会に検討を依頼することによって改善を図っていくこと、つまり、授業評価等の調査結果やFDで出された意見を今後の教育の改善に向けてフィードバックさせることがきわめて重要である。

2. 2003年度

2003年度はこれまでに2回のFDを実施した。1回目は7月2日に学生による授業評価等の集計結果の説明を行うとともに意見交換を行った。その概要は先の報告書にまとめてある。2回目は12月10日に「現代文化論を考える」と題して大学院人文科学府における「現代文化論」のあり方をめぐって何名かの教官に報告をしていただき、意見交換を行った。そして、大学院人文科学研究院および人文科学府は、「現代文化論」の出発点に立ち返り、その「現代性」「学際性」をめぐる議論を今後も組織的に対応していく必要があることを確認した。

このようにFDを何度か開催することで各教官の研究・教育の改善に寄与していることは一定程度認められると思う。しかし、FDも回を重ねると出席メンバーが固定化する。文学部で20名前後、人文科学府で15名程度と、出席者の数は過半数には及ばない。一昨年の全学FDに参加した折、講師の方が「FDの最大の目的は深海魚を起こすことだ」と発言されていたが、至言であると思う。教育の改善に関心の高い一部の教官だけで意見交換するに留めず、普段出席しない教官の教育への関心をいかに高めるかが今後の授業評価のあり方にも関わってくると思う。そのためには、出席しやすい話題作り、雰囲気作りが必要となろう。さらに、お堅い話題のみならず事務官とも共通に語り合えるような環境作りも必要だろう。こうした環境作りがうまく行けば教官・事務官・学生が共同して相互作用でき、「職場意識」の醸成につながる豊かな組織の形成につながると思う。

V. おわりに - 問題点と今後の課題 -

以上、学生による授業評価調査を中心に文学部および大学院人文科学府における教育と評価について述べてきた。授業評価もその実施母体となったFD委員会も発足して3年足らずであり、手探り状態の中でしだいに質・量ともに調査および活動の幅を広げてきた。こうした歩みが的確なものだったのかどうかについては、他部局との比較検討を行っていないため、現段階では判断しづらい。とはいえ、3年間の経験から問題点や今後の課題がいくつかクローズアップされてきたことも確かである。今後に残された問題点について述べることで、まとめにかえたい。

まず第1に、授業評価を行うには膨大な仕事量が必要である。これを一体誰が行うのかという問題がある。これまでに存在しなかった新たな業務を行うには、教官も事務官も手一杯の状態なのである。特に、後期の最後の時期に実施しようとする、事務官側はセンター試験、期末試験、大学院入試等の既存の業務がこの時期に集中しており、調査票の印刷や袋詰め等の作業を円滑に進めることは困難である。2003年度に調査票の配布および回収をTAにお願いしたのは、教師の手に委ねないことで学生による率直な意見の記入を期待でき、かつ教官・事務官の手を煩わさないという利点があるからである。

さらに組織的な観点からは、授業評価等の調査をどの委員会が行うのかという問題にもなる。人文科学研究院ではFD委員会が担当しているが、学務委員会あるいは自己点検・評価委員会にも関連する業務である。例えば全学教育の学生による授業評価は全学教育自己点検・評価委員会によって実施されている。確かに学生による授業評価は評価に関わることだから、自己点検・評価委員会が担当してもよい業務だろう。したがって、こうした業務を巡って組織の見直しが必要である。ついでに言えば、九州大学全体を見渡した時、全学FDは定期的に行われているものの、それを実施

する組織としての全学のFD委員会は未だ発足していない。九州大学における全学のFD委員会を設立するとともに、同委員会が各部局のFD委員会を統括し部局間の横のつながりや全学との連携を図る必要性は大きい。そして、授業評価の項目やデータ処理、集計等の作業を共通化できる部分は共通化した方が良いように思う。そうすれば、各部局が抱える負担の大きさを軽減できだろうし、調査結果の比較検討も可能となるからである。このように、授業評価については、全学的な組織体制作りを行い、専門スタッフによって調査を実施していくことが必要であると考えます。

ところで、2003年8月23日付けの日本経済新聞の教育欄に、大手予備校河合塾の評価研究部長である滝 紀子氏による、「大学改革へ学生が授業評価 - 実施運営面で改善余地」という記事が掲載されている。この記事の最後で、滝氏は「授業評価の十カ条」を述べている。それを列記すると以下のようなになる。①基本的に調査対象は全授業。教員の拒否は認めない。②各学期の中間と期末の二回実施。中間は授業中の話し方、板書、機器の使い方など教員のスキルや教室環境など、すぐに解決できるものに絞り、結果は担当教員にすぐに通知する。③回答時間は授業冒頭に十五分程度確保。④配布から回収には教員はタッチしない。⑤学生に責任ある回答を求めため回答用紙を二つに分け、択一式回答には学籍番号を書かせる。自由記述は無記名。⑥70%以上の回収率。⑦調査結果の教員へのフィードバックは翌学期開始前までに（調査後二ヶ月以内）。⑧教員個々の結果は学生、同僚教員にも公開。⑨評価結果を踏まえ、教員が自己点検・自己評価を実施。⑩大学全体で調査結果を分析、FD活動に活用。

この十カ条が理想の姿なのかどうか筆者には判断できないが、こうした厳密な授業評価を行うためには人的にも予算的にも豊富な資源が必要であり、この記事で指摘されているような授業評価を我々が実施するのは困難であることをまず指摘したい。専任教官がただでさえ多忙な研究・教育業務の合間をぬって、片手間仕事の委員会業務として行われている現状のような実施体制では、本格的な授業評価はどだい無理な話であろう。各部局とは独立した専従組織による全学的な対応を行わない限り、きちんとした授業評価の実施は不可能な気がする。繰り返しになるが、したがって、授業評価に関して各部局を束ねるような全学的な委員会が必要であり、そうした委員会のもとに専従組織が位置づけられることが望ましい。このように、授業評価等を行うための全学的な組織体制の整備が重要であることを指摘しておきたい。

以上のような組織作りだけでなく、文学部および人文科学府における教官・学生の授業評価に対する意識を高めることが必要であることも指摘しておきたい。意識を高めるためには、授業評価を毎年実施することで無関心を無くすとともに、的確な評価が大学における教育を質的に高める効果のあることを認識させる必要がある。この点に関して、先にも述べたように、文学部FD委員会では「カリキュラム・教育体制」に関する調査で不備を指摘された設備等は関連委員会に改善をお願いすることで、的確と判断される学生の意見を積極的に取り入れるように努めている。

このように、授業評価等の各種調査で出された意見を踏まえ、現状の問題点を明らかにし、改善に向けたフィードバック・システムを確立し、各種調査が現状の改善につながるという目に見える効果を全構成員に対して示すことが、授業評価等の各種調査を効果的かつ持続的に実施していくことにつながっていくと考えられる。

添付資料 2001年度文学部における授業評価調査票

文学部における授業評価アンケート

文学部FD(ファカルティ・ディベロップメント)委員会

文学部では、授業の内容・方法を改善し、いっそう効果的な学部教育を行うために、学生の皆さんの意見を伺うアンケートを実施することにしました。この調査は、今後の授業内容や方法の改善に資するために行うものですから、このアンケートへの回答が成績評価に結びついたり、あなたにとって不利になったりすることは決してありませんので、ご協力をお願いします。

なお、ご不明の点がありましたら、文学部FD委員会(委員長:高山倫明、アンケート担当:高木彰彦)までお問い合わせ下さい。

1 この授業の授業科目名・コード、あなたの所属・学年について、該当事項を記入して下さい。文学部の2~4年生の場合は、所属研究室名も記入して下さい。

授業科目名: [] 授業科目コード: []

文学部学生: 学年 [] 所属研究室 []

他学部学生: 学部名 [] 学年 []

2 この授業を履修受講した動機は何ですか、最もあてはまるもの一つに○を付けてください。

- 1 所属研究室の授業だから 2 授業計画(シラバス)の記載内容を見て興味深かったから
3 友人から勧められたから 4 教員免許の資格を取るために必要だから 5 学会員の資格を取るために必要だから 6 他に良さそうな授業がなかったから

7 その他(具体的に記入して下さい)

3 あなたはこの授業にどの程度出席しましたか。最も該当する番号一つに○をつけて下さい。

20%未満 20-40% 40-60% 60-80% 80%以上
1 2 3 4 5

4 この授業の内容についてお尋ねします。最も該当する番号一つに○をつけて下さい。

4-1 授業内容は興味深かったですか。

全く興味がちてなかった 2 3 4 大変興味深かった
1 5

4-2 授業内容は理解できましたか。

全く理解できなかった 2 3 4 よく理解できた
1 5

どういった点が理解できたか、あるいは理解できなかったのか、具体的に記入して下さい。

4-3 授業内容を理解するために予習・復習をするなど努力しましたか。

全く努力しなかった 2 3 4 おおいに努力した
1 5

4-4 この授業を履修して専門分野の理解や知識が深まりましたか。

全く深まらなかった 2 3 4 おおいに深まった
1 5

4-5 この授業を履修して良かった点を下欄に記入して下さい。

4-6 授業内容の改善について要望したいことがありましたら、下欄に記入して下さい。

5 この授業の方法・テクニックについてお尋ねします。最も該当する番号一つに○をつけて下さい。

5-1 声は聞き取りやすかったですか。

非常に聞き取りにくい 2 3 4 非常に聞き取りやすい
1 5

5-2 板書はわかりやすかったですか。

全くわかりにくい 2 3 4 非常にわかりやすい
1 5

5-3 説明はわかりやすかったですか。

全くわかりにくい 2 3 4 非常にわかりやすい
1 5

5-4 配付資料は適切でしたか。

全く不適切 2 3 4 適切
1 5

5-5 授業の進行は適切でしたか。

遅すぎる 2 3 4 早すぎる
1 5

5-6 授業の開始時刻は適切でしたか。

遅すぎる 2 3 4 定刻通り
1 5

5-7 休講の回数はどの程度ですか。

多い 2 3 4 少ない
1 5

5-8 授業の方法・テクニック等について改善してほしい点を、下欄に記入して下さい。

ご協力有り難うございました。

※この調査用紙は、2月8日(金)までに、学生掛に設置されている「回収箱」に投入して下さい。